MACF 礼拝説教要旨
2024 年 1 月 21 日
「救いの創始者イエス」
ヘブライ人への手紙 2 章

10 というのは、多くの子らを栄光へと導くために、
彼らの救いの創始者を
数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万
物の目標であり源である方に、
ふさわしいことであったからです。
11 事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とさ
れる人たちも、
すべて一つの源から出ているのです。それで、イ
エスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、
12「わたしは、あなたの名を
わたしの兄弟たちに知らせ、
集会の中であなたを賛美します」と言い、
13 また、「わたしは神に信頼します」と言い、更に
また、
「ここに、わたしと、
神がわたしに与えてくださった子らがいます」
と言われます。
14 ところで、子らは血と肉を備えているので、イエ
スもまた同様に、
これらのものを備えられました。それは、死をつか
さどる者、つまり悪魔を御自分の死によって
滅ぼし、
15 死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった
者たちを解放なさるためでした。
16 確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハ
ムの子孫を助けられるのです。
17 それで、イエスは、神の御前において憐れみ深
い、忠実な大祭司となって、
民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じ
ようにならねばならなかったのです。
18 事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこ
そ、試練を受けている人たちを助けることが
おできになるのです。
＊＊＊＊

ヘブライ人への手紙の著者はイエス様について 1
章でもいわゆる偉大な人物というより
神様から特別な使命を与えられた救い主、であり
最終的な神様からのメッセンジャーという
形で紹介されていましたが、2 章でもこのイエスと
いう存在は「救いの創始者」なのだと教えていま
す。

1）苦難を通過された救いの創始者
このお方は、人間が通過するあらゆる苦難を通過
され、まさに私たちの痛みがわかる
存在として紹介されています。
18 節には「事実、御自身、試練を受けて苦しまれ
たからこそ、試練を受けている人たちを
助けることがおできになるのです。」とありますが、
苦難を通過し試練を通過してくださった
救い主だからこそ、私たち人間に寄り添い、理解す
ることができるということです。

2）わたしたちを兄弟と呼んでくださる救い主
11 事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とさ
れる人たちも、
すべて一つの源から出ているのです。それで、イ
エスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、
12「わたしは、あなたの名を
わたしの兄弟たちに知らせ、
集会の中であなたを賛美します」と言い、
13 また、「わたしは神に信頼します」と言い、更に
また、
「ここに、わたしと、
神がわたしに与えてくださった子らがいます」
と言われます。

イエス様は私たちの救い主なのですが、私たちの
ことを「弟、妹」として取り扱ってくださいます。
これは夢のような出来事ですが事実です。救い主
は上から目線で偉そうに何かを命令する存在では

ありません。むしろ、兄として寄り添ってくださるというのです。

3）私たちの現状：死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者
私たちは不安と恐れの奴隷となっており、またさまざまな人間的な規則や戒めの奴隷に
なっていました。自分の思い込みの奴隷になっていたかもしれません。
罪の奴隷でもありました。内側からの欲望の力には勝てず、立派になろう、正しく生きようと
思ってもなかなかそれが実行できない、むしろ奴隷のように引きづられてしまう存在でした。

4）大祭司イエス；仲保者イエス
イエス様は私たちと父なる神様との間に和解を取り付け、死と罪の奴隷状態から解放し
神の家族の一員として生きられるように、私たちのための「執りなし手」となり
罪を償ってくださいました。
ヨハネ第一の手紙 4 章には
9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが
生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。
10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、
わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。
と書かれていて、私たちのための「償いの代価」あるいは「人間の悪を全て担う場所、
それ故に赦しの出来事」として十字架にかかってくださいました。

罪の支払う値である「死」をイエス様が通過し、復活されたことで「死と悪魔」を
滅ぼしたと言われるようになりました。死は悪魔の最大の武器だったからです。
イエス様を「死」の中に閉じ込めておくことができなかったので、悪魔の力は
破壊されてしまったのです。
＊＊＊＊＊＊＊
こんな詩があります
「神への告発」　関根一夫訳

神の御座の前に何万という人々が集まっていた。
その集団の前方の人々は怒りにも似た強い語調で叫び声をあげた。
「神が俺たちを裁く権利など本当にあるのか？神に俺たちの苦しみなどわかるものか。」
彼らはシャツをたくしあげ、ナチスの収容所で受けた傷と、入れ墨で書かれた囚人番号とを見せた。
「俺たちは、殴られたり、迫害されたり、虐待されたりして、死にいたる苦しみを受けてきた。」
別の集団の黒人が、襟を開いて、「これを見てくれ」と叫んだ。
黒人であるというだけでリンチにあい、縛り首にされたというロープの跡があった。
「俺たちは、奴隷として苦しみを受けてきた。愛する家族と離れ、死が安らぎをもたらすまで、
苦役に服さなければならなかった。」
広場には、地上で苦しみを味わった何百というグループが群がっていた。
そして、それぞれに神に対して「なぜ地上であんな苦しみにあわせたのか」と口々に責め立てていた。
「神なんて、楽なもんだよな。光と麗しさに満ちた天国に住んでてさ。」
「どこにも、涙も飢えも危険もありゃしない。」
「実際、神に地上の人間が受けている苦しみや痛みがわかるのだろうか。」
そこでそれらの集団は、それぞれに地上でもっとも苦しい経験をした人たちをリーダーに選んで
告発会議を開いた。そこにはユダヤ人、黒人、インドの最下層の人たち、広島、長崎の人たち、

そしてシベリヤの収容場に入れられた人などがリーダーとして選ばれてきた。彼らは告発会議を開き、
次のような結論に達した。
「決議文」
神が、我々人間に対する裁き主、主となるためには、神ご自身が人間の味わった苦しみを、
しかも最も厳しい苦しみさえも経験しなければならない。
具体的には
※神は人間として地上に住むべきだ。しかも、その全能の力を用いて自分を苦しみから守るような事がないよう約束を取り付けるべきだ。
※ユダヤ人として生まれるようにしよう。彼の誕生に疑いがかけられるような方法で生まれさせ、
誰が父親なのか世の人にわからないようにしよう。
※彼を正義と真理のチャンピオンにして、世の人々のねたみや憎しみを受けさせ、
既成の宗教家たちからもののしられるようにしよう。
※彼に人間が見たことも、聞いたこともないような事柄を教える立場を与え、神を人間に紹介する役目を与えよう。
※最愛の人から裏切られる経験をさせよう。
※無実の罪で捕らえられるようにしむけ、しかも偏見に満ちた陪審員の前で臆病な裁判官によって裁判を行わせよう。
※ひとりぼっちで取り残され、人々にまったく、捨てられてしまうという辛さを味あわせよう。
※拷問にかけよう。そして、殺されるように仕向けよう。しかも、最もつらく苦しい十字架刑で。
・・・
リーダーたちの決定したこの告発決議文が読み上げられた時、そこにいた何万という人々の中からざわめきと納得の声があがった。
しかし、ほんの数分後に沈黙が始まり、その静寂は長く続いた。
誰も声をあげず、誰も動こうともしなかった。
そこにいた、すべての人々が、はっきり気づいたのだ。
神が、すでにこの決議文を実行していたということを・・・。
＊＊＊＊＊＊＊
ペトロはこう書きました。
「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。」1ペトロ 2:23-24
＊＊＊＊＊＊＊
私たちの救いの創始者は、これら全ての苦難を通過なさいました。

＊＊
MACF 礼拝映像は
https://youtu.be/qndkeTYtXVc